



子供の可能性に期待する

校長 関原 秀明

昨年度に引き続き校長を務めます、関原でございます。今年度もどうぞよろしくお願ひします。

先日入学式を終え、全校児童144名で新年度がスタートしました。

始業式で子供たちにこんな話をしました。
～ 皆さんには可能性があります。「可能性がある」とは、「今できなくてもこれからできるようになることがたくさんある」ということです。思い出してみてください。今まで書けなかった、読めなかった難しい漢字や、解けなかった計算ができるようになっていきますね。今までできなかった二重跳びが何回もできるようになっていきますね。難しそうだと思っても失敗を怖がらないで挑戦しましょう。ここにいる先生や職員が全員で必ず応援します。皆さんの活躍を楽しみにしています。～



入学式 元気いっぱい返事をする1年生

子供たちの可能性に期待する気持ちを伝えました。「期待」という言葉から連想する用語があります。教員免許を取得するために必ず勉強する心理学用語で「ピグマリオン効果」というものです。「人間は期待されると、期待されたとおりの結果を出してしまう傾向がある」という心理的行動を言います。その根拠とされるのが、アメリカの教育心理学者が小学校の学級を使って行った実験です。「今後成績が伸びる児童を割り出す知能検査」を実施した結果だと偽り、学級担任に「この名簿に載っている児童は今後数か月の間に成績が伸びる」と根拠のない情報を伝えました。すると、その後名簿にある児童の成績が確かに向上したというのです。「そんな魔法があったら誰も苦労しない」と思わず言いたくなる場所ですが、こう分析されています。担任が期待のこもった眼差しを向け指導を工夫したこと、その子供も期待されたことを意識し応えようとしたことがそのような結果につながったのではないかと。

私は中学校の教員の経験が長いのですが、その中で接してきた、なかなか素直になれない生徒たちは、無視されることを大変嫌います。反抗的な態度で教師を遠ざけようとしながらも、いざ無視されると「どうせ俺なんか」という自分を否定する言葉を使ったり、一層反抗的な態度をとったりします。それでもそうした生徒に寄って行き、「どうした、なんかあったか?」「あなたはがんばれるはずだ」と、今と未来のあなたに興味・関心があり、心配しているという気持ちを言葉にしていくようにしていました。そうすると、表情や態度に変化が表れ始めることが何度もありました。そんな経験から、「期待」が根底にある指導が重要だと考えています。

もちろん「ピグマリオン効果」は絶対的なものではないでしょうし、過度で重荷になるような期待は返って逆効果の場合もあるので、気を付けなければなりません。しかし、子供が失敗したり、努力がなかなか実らなかつたとき、大人が焦って可能性を否定した言葉を掛けると、負の「ピグマリオン効果」が表れ、悪い結果を「期待」どおりに出してしまうこともあります。子供がピンチのときこそ、可能性に期待をこめた言葉が、子供の成長を助けると信じています。

小学生の頃、芳しくない通知表を前に、祖父母が私に掛けてくれた言葉を今でも懐かしく思い出します。「やればできる子だから」

学校生活の様子から

○ 16名の1年生が入学してきました。おめでとうございます！（4/6）



○委員会活動がスタートしました。～4，5，6年生～（4/12）

運営委員会



健康委員会



給食委員会



広報委員会



環境委員会



図書委員会



☆学校行事や学年行事等をホームページでもお知らせしています。是非ご覧ください。
アドレスは <http://kuniyoshi-e.el.tym.ed.jp> です。